

## 異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての 「我々」と「彼等」のコミュニケーション問題（17）

—異文化教育における「ジェノサイド」(2)—

青 木 順 子

'Genocide' in Intercultural Communication Education (2)

Junko AOKI

### 要 旨

ジェノサイドの特異性—「出来事の記憶」「政治的配慮」「大勢が該当する」, 「完全な正義の回復の実現不可能」, 「法の外の『別方法』」—ゆえにおきる正義を取り戻す時に直面する困難に対して, 異文化教育が考えを学習者に提示するとしたら, ジェノサイドを実施した政治システムを「支持した個人」としての責任を, 証言の不完全性が存在する中でも, 法廷での法による罰則で裁き, 被害者に正義を戻すこと, それが, 負のスパイラルに陥るしかない報復ではなく赦しに向かえる唯一の方法であること, その後だけ, 赦しは起こり得て, その赦しによってだけ, 人々はジェノサイド後を再び本当の意味で生き得ること, その時は, 法による罰が報復の論理に陥らないように, 法が政治と分離した公正な立場を維持できる努力が不断に要求されること, となる。この過程を真摯に実施することだけが, 不完全なジェノサイドの記憶の困難を補い得る唯一の方法なのである。(396字)

キーワード：異文化コミュニケーション教育・異文化コミュニケーション・異文化教育・ジェノサイドと正義・ジェノサイドと赦し

一個人の幸福感という主観的な感情の充足と, そこに存在する大多数の個人の多種多様な幸福が実現するような, 社会全体として見た時の幸福感の存在, すなわち, 幸福なる社会の実現, そして, その範囲をさらに広げ, 「異なる人々」の属する社会における幸福の実現, という観点を, お互いにどのように関係づけて扱うのかという問いは, 異文化コミュニケーション教育が, 「教育」として, 教育を受ける者の自己実現の達成を手助けする限りにおいて, 必然的に出てくる問いである。個人の幸福の実現, 幸福なる社会と個人の幸福の選択との関わり, 異なる人々の幸福なる社会との関わり, 「我々の幸福なる社会」を守ると主張する「我々の愛国心」の存在, 「我々の正義」の存在, 戦争の後の幸福なる社会, 戦争の後で「赦し」が意味するものと, それが与える幸福への可能性を考えていく過程を経て, ジェノサイドについての考察をすることなく異文化コミュニケーション教育における幸福なる社会の扱いについて考察を進めることはできないと筆者は考えるにいたっている。

現時点で、異文化コミュニケーション教育において「ジェノサイド」を異文化コミュニケーション教育ではどのように扱うべきなのだろうかという問いに対して言えるのは、ジェノサイドの事実をともかく「正しく教える」こととなろう。個々の人間が、ジェノサイドという犯罪についてまずきちんと知ること、そして、その犯罪行為の人間の尊厳への冒瀆について理解すること、そして、その上で、正しい知識を持った人々がその後どれだけ共感を持った生き方をしているのかを妥協せずに問うこと、これらがまず異文化コミュニケーション教育が取り組むことができることである。その正しい知識を持たせることには、ジェノサイドの歴史的事実の理解だけではなく、当然、ジェノサイドという犯罪の特異性とそれから派生するジェノサイド後の困難についての理解が含まれなければならない。学習者に何をどのように理解させるべきなのかを整理し明確化する責任が、異文化コミュニケーション教育を専門とする者にあることだけは確かなのである。

ジェノサイドという犯罪の特異性は、「ジェノサイド後」の正義を取り戻す過程にも困難をもたらす。大きく分けて五つの困難が考えられる。第一の困難は、特定の文化集団に向けられる組織的、暴力的犯罪に必然的に伴う「出来事の記憶」に関わってくる困難である。第二の困難は、多くが国家や民族の規模である組織的な犯罪であるがゆえに、加害者を法廷に連れ出すことに多くの「政治的配慮」が入ってくることにある。第三の困難は、たとえ一番目と二番目の困難が克服されても、組織的な犯罪であるがゆえに、加害者が膨大な範囲に広がり、「大勢が該当する」ことである。第四の困難は、最初の三つの困難が克服されるように見える時でさえ、ジェノサイドのような暴力行為に対して被害者に正義を取り戻す行為は、「完全な正義の回復と思えるような形」—それが存在していると仮定したとして—では実現可能とならないことである。それが、第五の困難—ジェノサイドのような犯罪は、まさにその特異性のために、正義を取り戻すために、法の外の「別方法」が被害者には必要に思われる—に繋がっていく。この五つの困難は、相互に密接に関わりあっている困難でもある。前稿<sup>(註1)</sup>では、この「ジェノサイド後」の正義を取り戻す過程の困難として挙げた中の第一の困難、特定の文化集団に向けられる組織的、暴力的、犯罪に必然的に伴う「出来事の記憶」に関わってくる困難について考察し、さらに、第二の困難、「政治的配慮」の存在について触れた。本稿では、引き続き、正しく知ることの根底にあるべき、ジェノサイドの特異性とジェノサイド後の困難さについての考察を進めたい。

本稿は、1975年に初版が出たチェコ系ユダヤ人、アヴィドル・ダガンの『宮廷の道化師たち』<sup>(註2)</sup>—「ホロコーストについて書かれた最もパワフルな本の一つ」、[ギンター・グラスやミラン・クンデラの様式で書かれた、ホロコーストから派生した重要な哲学的な疑問のいくつかを探求する現代のお伽噺]などの書評が与えられた<sup>(註3)</sup>—を基にして、考察を試みている。

### 1. 『宮廷の道化師たち』—神の存在・不在

『宮廷の道化師たち』は、ジェノサイドの最中、強制収容所の司令官コーンのパーティの賑わいを担うために選択された四人のユダヤ人男性の人生を描いた小説である。物語を最初から最後まで語るのは、私。その私は、その四人の一人で、収容所に入る前は判事をしており、生まれて間もなくおきた事故によって身体障害があり、子ども時代から予知能力を持っている。私の他に、機転の利く座輿に長けている小人のレオ、見事な技を持つ曲芸師のヴァーン、かつては歴史学の研究者で大学図書館に勤めていて、占星術を熟知しているマックスがいる。四人がパーティ

で各自期待されている役割を果たして、コーンが満足するようにパーティの余興を務めている限りは、少なくとも他の者たちよりは食べ物を得て、日中の作業も軽減され、生き続けることが出来る。

ある夜のパーティで、ヴァーンが七個のカラーボールを巧みに回転し続ける様子に、コーンは士官達との賭けを思いつく。コーンの賭けに応じた士官達がヴァーンをいくら失敗させようと試みても、ヴァーンはボールを落とすことはなく、その度にコーンは儲けていく。不意に驚かす、ピストルで天井を撃つ、女性に誘惑させるといった様々な試みをされても、ヴァーンはただただ回し続け、ついにコーンは全ての賭け金を手に入れる。その時、一度は賭けに負けてしまった士官の一人、ヴァルツ大尉が、再度の賭けを申し出る。今回彼が試みたのは、同じ収容所にいるヴァーンの妻エステルをパーティに連れてこさせ、ヴァーンを動揺させることだった。裸身で部屋に立ちすくむ妻を前にしても、ヴァーンはひたすらボールを回し続ける。コーンの役に立つことがイコール生きることであるような状況では自分は失敗は出来ないと考えながら、「生きるのだ。生きるのだ。」と言い聞かせて、ボールを回し続ける。自分の賭けの試みが再度失敗しそうなことに苛立ったヴァルツは、銃身をエステルに触れ、射殺することを口にして、ヴァーンの動揺をさそおうとする。それでもヴァーンは回し続ける。不意に銃声が響き、エステルが床に倒れる。ゲームの行き過ぎに、コーンはパーティを終わらせる。人々が立ち去る中、ヴァーンは、まだボールを回し続けており、最後は他の三人が抱えて収容棟へ連れていく。

回想の語り手である私は、こうした収容所の日々ほど、自分達が神の身近にいたことはなかったと振り返る。定められた運命として受け止め、信仰が揺らぐことがない人々が大勢いたと語る。それなのに、彼の記憶の出来事には、神の不在がある。「神はすべてお見通し」という歌詞の入った歌をいつも口ずさんでいた仕立屋の男は、ほんの些細な違反の罰として戸外に出され、同じ歌を歌いながら厳寒の中を凍え死ぬ。私は、信仰を持つ人々も、次第にその祈りにおいて「もし、神よ在せば……(p.69)」と語ってきていると気付く。神の不在を感じながら、一方、それでも、全ての人々が神の身近にいたいと願い、私もまた神に何らかの意味をなす答えを求めており、選ばれた四人も何らかの神の意図でこうして生きながらえているのだと思っている。

四人とも解放の日まで生きながらえる。小人のレオは、収容所から彼等を乗せて出ていく列車の間に挟まれるという事故で、解放を味わう間もなく死亡する。そして、これが、語り手の私が神の不在を決定的に悟る瞬間となる。なぜなら、「その瞬間からもう神を当てにすることはありませんでした。(p.78)」イスラエルに最終的に渡り落ち着くが、判事の仕事にも戻らない。裁く行為、裁く側にいることへの懐疑が今の彼にはある。残りの二人の消息も知らないまま時が起つ。そしてある日、偶然マックスに再会し、解放後彼に起きたことを聞くことになる。マックスは、かつて愛し合い、彼の身を案じてくれていたドイツ人女性ヒルダの家へ向かう。分かったのは、彼女と父親が、ユダヤ人を匿ったためにすでに射殺されていることだった。彼もまた、以前のような大学図書館ではなく、観光客のガイドとして生きている。その後、たった一人わからなかったヴァーンの情報も、テロ行為による負傷者の名前を伝えるニュースで知ることになる。彼もまたイスラエルに住んでいたのである。私は、腕を失うという酷い負傷をした彼を病院に見舞う中で、戦後彼に何が起きたのかを彼の口から聞くことになる。

妻エステルを射殺したヴァルツに対する復讐をその後の人生の目的と決めたヴァーンは、ヴァルツを探し続ける。その途中で、戦争犯罪人捜査の仕事をする男性としばらく働くことになる。一緒に働きながらも、二人は、大きく異なる目的を持っている。男性は法的な場での公正な刑罰

を目指し、ヴァーンは復讐を目指している。そのために、二人の間ではしばしば議論が起きる。法による刑罰こそが唯一の正義と考える男性に、ヴァーンはこう言う。「いったい誰がさばくというんだ？ (pp.157-158)」法律だと答える男性に、ヴァーンは、十分な罰を与える法律など存在しないと言う。「いったいぜんたいじゅうぶんな刑罰なんてありうるのか？どんな刑罰が、実際に行ったあらゆる残虐行為のほんの一端にもじゅうぶんだと言えるのかい？みずから手をくだして、何十人いや何百人の無防備な人びとを殺した連中だぞ。その連中一人一人を百回死刑にしたいのか。(p.158)」これに対して、ヴァーンは、「私の妻を殺した犯人は、生きつづけてはいけないのだ。(p.158)」と言う。「この世で他人は誰も当てにはしない。自分だけだ。ここでこの両手でその男が生きられないようにするんだ。(p.158)」男性は言う。「そして結局、いま君が捜しているように、ほかの誰かが君を探すようになるわけだ。(p.158)」いつも議論は一致することなく終わる。

やがて、ヴァーンは、ヴァルツを探しながら、ナチスの残党が多く逃げていったアルゼンチンにたどり着く。その頃の彼は、最初の頃の復讐への激しい思いで駆り立てられるのではなく、ある種の平穏を感じるようになっていく。そこまで神が導いてくれたという理由において、神への信仰心も取り戻し、祈祷所にも顔を出すようになっていく。今や彼には、復讐は神の意志のように思われる。そして、ついに、ある日、名前を変えて工場に勤めて暮らしているヴァルツを見つける。その夜、祈祷所でヴァーンは神に感謝する。今や神の意志が彼とともにあるという予感確信となる。

翌日、待ち伏せていたヴァーンは、工場から出て車に乗り込もうとしたヴァルツをそのまま車に押し込み、自分が運転して、彼を眠らせたまま海岸に運ぶ。誰ひとりいない暗くなり始めた海岸で目覚めたヴァルツが見たのは、縛られて横たわる自分の前で、カラーボールを回し続けるヴァーンである。ヴァーンの言葉に記憶を呼び起こし、復讐の意図を聞かされたヴァルツは、完全に取り乱し、半狂乱状態で、泣き喚き、命乞いをする。投げ続けていたボールをしまい、ピストルを取り出し、「積りに積もった憎悪と燃えるような復讐心 (p.209)」を言葉にこめながら、ヴァーンには一つの疑念が沸き起こる。「今自分で話したことを何であれ本当に実行できるのだろうか (p.209)」それは、「自身が本当に神の手中にある道具なのかどうか自問自答 (p.209)」することでもある。神がここまで導いてきたのだという確信は揺らぎ始め、実は自らが試されていたのではないかと感じ始める。「彼も人を殺すことができること、しかも無防備の人間を、何らヴァルツに優るものではないことを神はヴァーンにただ示したいと望んでいるのではないのか？ (p.211)」

ついに、ヴァルツに歩み寄り、拘束を解き、悪態をついて、抵抗をすることをヴァルツに呼びかける。それでもヴァルツが恐怖におそわれているだけなのを見て、さらには裸になれと言ってみる。屈辱を与えたら抗うのではないかと期待しながら。しかし、ヴァルツは、ただ従うだけである。かつてのエステルのように、ヴァルツの前に裸で立っている。抵抗もしないとしたら、ここで自分は決着をつけるべきなのだと思います。ヴァーンは嫌悪感で一杯になってしまう。ところがその決着は、予想もつかない形でつく。ヴァルツが海に向かって行進を始め、そのまま海に呑み込まれてしまうのである。ヴァーンは神への感謝の気持ちに満たされる。「長年彼自身が練り上げた計画の中に唯一準備できていなかった、神のなされた、最後の一步 (p.215)」だったのである。

## 2. ジェノサイド後の困難—報復・復讐

前節で紹介した物語を例に、ジェノサイドの特異性がもたらすジェノサイド後に正義を取り戻す過程での困難のうち、第三、第四、そして第五の困難について考えてみたい。第三の困難は、組織的な犯罪であるために「大勢が該当する」こと、第四の困難は、被害者に正義を取り戻す行為は、「完全な正義の回復と思えるような形」では実現可能とならないこと、そして、それらが第五の困難—正義を取り戻すために、法の外の「別方法」が被害者には必要に思われる—に繋がっていく。ヴァーンは、賭けに勝つために妻エステルを自分の前に連れ出し、賭けに負けたことに逆上して射殺したヴァルツに復讐を誓う。しかし、そもそもヴァーンは、なぜ宴で曲芸をさせられているのだろうか、なぜ収容所にいるのだろうか、なぜ妻は収容所にいるのだろうか、裸で連れ出されるのだろうか、いとも簡単に射殺されるのだろうか——問いかけるまでもなく、エステルの直接の殺人者の、その行為の残酷さを可能にしたのは、この組織として存在した犯罪、ジェノサイドの行使者達である。もし収容所で四人の人間を自らの宴の道化師として扱い、従う者にのみ限られた生の存在を許す収容所長コーンがいなかったら、そもそもヴァーンは宴にいなかったはず、さらにいえば、もしジョノサイドがなかったら、ヴァーンもエステルもその場にはいなかったはずなのである。ヴァーンが、妻の死に対して最後に直接手を下したヴァルツだけを復讐の対象としたことは、このジェノサイドの特異性がもたらす困難から来る。実際には、「大勢が該当する」。また、戦争犯罪人を法廷に連れ出すことを仕事にしている男性との会話にあったように、あれだけの犯罪に見合うような罰は百回もの死刑を与えたとしても存在しないように誰にも思える。そうすると、さらに「完全な正義の回復と思えるような形」は不可能で、「別方法」が必要に思われることが起きる。法廷ではなく、自らの手で直接の罰を与えるしかない当事者に決意をさせてしまうことが「あり得る」ことになる。第五の困難である。ヴァーンは、そのように一度も意識はしたわけではないが、ヴァルツ一人を対象とすることが、唯一彼に実現可能に思える選択だったといえる。客観的に考えるならば極めて偏った選択であっても、その偏った選択しか在り得ないと当事者に信じさせてしまうところに、このジェノサイドという出来事の特異性があるのである。

まず、この第五の困難に焦点をあてて考えてみたい。法廷の外、法律で下される罰以外の罰を自らが与えることしかないと考えてしまう—すなわち報復による応答、「復讐」の実行である。ヴァルツを見つけ出し、自らの手で殺害しようとした時、ヴァーンは何を見たのだろうか。ヴァルツと同じレベルの人間に、その殺害行為によって落ちるのであろう自分である。つまり、復讐は、その行為によって、不当な行為を試行した者たちと同じような人間になるという感情を結局もたらすことになるのだ。こうした復讐のもたらすことについて、G. Muller-Fahrenholzは、*The Art of Forgiveness*<sup>(註4)</sup>において、以下のように述べている。

Revenge is also about maintaining an equity of suffering. There must be a gruesome compatibility of guilt and suffering on both sides. The scales must be balanced. Each party in a vendetta must share the same suffering. The perpetrator must be made into a victim while the victim becomes a perpetrator. This attempt to establish an equitable level of “dignity” must be called an act of despair, because it meets violence with violence.<sup>(註5)</sup>

(復讐は、苦悩を等しく与えることになる。双方に、罪悪感と苦悩のぞっとするような互換性が存在することになる。その程度は平衡を保たれており、復讐に関わる双方が同じように苦悩することになる。)

加害者は被害者になる一方、被害者は、加害者になる。等しい「尊厳」のレベルを確立するこの試みは、復讐が暴力に暴力で応えることから、絶望の行為と呼ばれるしかないのである。

Moreover, it turns into a cult of violence because no attempt is made to heal or in any way transcend the suffering, only to replicate it. Within a culture of revenge nobody believes that the fateful mechanism of violence can be broken or suspended. The only course that seems open is to step more and more deeply into guilt. And so the downward spiral of violence is fixed.<sup>(注6)</sup>

(さらに、苦悩を癒す、何らかの方法で変更するような試みは一切されず、ただ、暴力を複製するゆえに、暴力は、暴力のカルトなるものに変容してしまう。復讐の文化においては、宿命的な暴力のメカニズムを壊すことができる、または止めることができるとは、誰も信じないのである。唯一取ることが可能と思われるのは、さらに罪悪に入り込むことだけである。そうして暴力の下方スパイラルが固定してしまう。)

ヴァーンが、最後の復讐の行為直前において、激しい嫌悪感を持ち、ためらうしかなかったのは、まさに「復讐のもたらすもの」を感じたからである。しかし、復讐をするためにそれまで生きてきたヴァーンは、この突然の思いがけなく湧き上がった感情に、どのように対処してよいかわからない。だからこそ、最後の最後、手を下す前に、ヴァルトが狂気のようになって自分で海に入っていったことで全てが終わったことは、神がなされた祝福のように感じられたのである。彼自身による暴力の行使は、まさに最後の瞬間止められたのだから。

再度、ジェノサイドの特異性が与える困難に戻って考えてみよう。ここまで考察してきたと言えるのは、ジェノサイドの後の正義を取り戻す行為の遂行は、第三の困難の存在があるゆえに、そして、第五の困難が、人々がジェノサイド後に生きることをさらに難しくするゆえに、第四の困難の克服への努力は「必ずなされなければならない過程」だということになる。つまり、「完全な正義の回復と思えるような形」を出来得る限り真摯に追求する「しかない」のである。

### 3. 正義を取り戻すことの困難

その第四の困難に焦点をあてて考えてみたい。今まで考察してきたように、この困難の克服こそが、第三と第五の困難を乗り越える唯一の道である。しかし、必然的に、第四の困難は、第三と第五の困難が関わるがゆえに、「完全なる正義の回復と思えるような形」に実施においては、議論を避けられないことになる。例えば、アレント<sup>(注7)</sup>のアイヒマン裁判についての一連のレポートによって引き起こされた著名な論争のように、である。ここでは、その論争について、アレントの『イエルサレムのアイヒマン』<sup>(注8)</sup>の訳者、大久保による「解説」<sup>(注9)</sup>において三つに大きく分けて提示してあるものを示してみたい。一つ目として、ナチス政権下のドイツ人を同罪とするアレントの考えは、ナチスに批判的であったドイツ人や抵抗運動をしたドイツ人の存在を無視するものである。二つ目は、ナチスに協力をしたユダヤ人、例えばユダヤ人評議会に対する責任の言及である。三つ目に、アイヒマンは「平凡な悪人」であるとして、「悪の陳腐さ」を指摘したことである。大久保は、これらのアレント批判の論点に対して、以下の点を挙げてアレントを弁護している—アレントの論稿を読む限り、ヒトラーに反対していた無名の人々の存在をアレントが忘れていないとは思えないこと、ユダヤ人のナチスへの協力の事実自体はかなり信憑性のあるものであること、また、これを記したことで、アレントがアイヒマンの罪責を緩和しているのではないこと、そして、多くの人々にとって不都合な「平凡な悪人像」は、大久保自身もナチ

ス党員の回想や伝記を訳していて漠然と感じていた思いであり、「陳腐な悪」の出現は決して全体主義の中だけに起こる危険ではないことを考える時、アレントの指摘は大きな意味を持つものであること一である。

アレントは、前掲書の「あとがき」や彼女の数々の論稿において、アイヒマン裁判についての彼女への諸批判も踏まえて、彼女の考えを説明している。まず、過去について、その場にいなかった者が裁く権利があるのか・裁く私とは誰なのか、そして、過去の出来事や事件をそもそも裁くことができるものか、という二つのよく提示される疑問に答えて、「裁く権利<sup>(注10)</sup>」を主張する。歴史も裁判も、私たちに裁く能力がなければ、不可能なのだと言い切り、そうであれば、結局、出来事を裁く能力が「後知恵」であることは不可避なのだと言う<sup>(注11)</sup>。だからこそ、「裁く私とは誰か」の語りを理由に裁判自体の正当性の疑念に持っていくことは、まさに「まがいの謙虚さ」に過ぎない<sup>(注12)</sup>。

また、ジェノサイドに対して、国民の集団責任、つまり「すべての人に罪がある」と、集団的罪にしてしまうことに伴う問題を挙げる<sup>(注13)</sup>。全世代が、歴史の持続の中に誕生したという事実においては、自国の過去の行為の恵みと罪を負わされる<sup>(注14)</sup>。しかし、「自国の国民の罪について、人類の罪について、すなわちわたしたちがみずから実行しなかった行為について、罪を感じるということができるのは、比喩的な意味において<sup>(注15)</sup>」だけであり、その多くは、「道徳という観点」においては、罪を犯していないのである。アレントは、集団的罪の論理を持つてくること自体が実際に罪を行った人を免除する機能として働くことを指摘している。「罪と無実の概念は、個人に適用されなければ意味をなさない<sup>(注16)</sup>」からである。

さらに、上記のことは、組織的に大勢が関わりあうことでしか遂行できないジェノサイドのような犯罪において、自分は自らの意志など持ちえない、組織の歯車にすぎなかったという「歯車理論とでも呼びたい理論<sup>(注17)</sup>」によって、自分の罪を免除されるかのように主張することへの批判に繋がっていく。これは本論文で考察してきた第三の困難とも関連するのであるが、「大勢が該当する」ゆえに、法の裁きにおいて、その大勢の側は、組織の歯車であったことを持って、ジェノサイドという犯罪への自らの関わりを逃れ得るのだと主張することである。しかし、アレントによれば、政治的に最終的な決定をする者は一人であり、完全な責任を負っているとしても、他の「誰も個人的な責任を負わない<sup>(注18)</sup>」ことには繋がらないのだという。犯罪行為となる公的なシステムに参加した以上、たとえ末端の歯車で他に取り道はなかったと主張しようと、個人的責任を逃れることは出来ないのであり、アレントは、裁判が裁くのは、人々を歯車に変えたシステムや事実ではなく、個人がシステム中で「支持」したものだという<sup>(注19)</sup>。だから、「なぜ服従したのか」ではなく、「なぜ支持したのか」という問いに変えて問われるべきであり、その時、私たちが、なぜ歯車理論で個人の罪を裁くことをためらってはいけなかが明瞭になってくるのである<sup>(注20)</sup>。

以上を踏まえて、『イエエルサレムのアイヒマン』のアレントの最後の記述を示してみたい。「正義」を明確に見せる必要、「政治を支持した個人の責任」において、法廷で裁かれなければならないこと、そしてジェノサイドという犯罪には、法に基づいての最高刑—すなわち死刑は正当であったことを述べている。

或る種の<人種>を地球上から永遠に抹殺することを公然たる目的とする事業にまきこまれ、そのなかで中心的な役割を演じたから、彼は抹殺されねばならなかったのである。そして「正義は単におこなわ

れねばならないだけでなく、目に見える形でおこなわれねばならぬ」ということが真実であるならば、イエルサレムでおこなわれたことの正義は万人の目に見えるような形であらわれて来たであろう、もし判事におおよそ次のような言葉で被告に呼びかける勇気があったとすれば。<sup>(注21)</sup>

君はまた、最終的解決において君の演じた役割は偶然的なものにすぎず、ほとんどどんな人間でも君の代わりになれた、それ故潜在的にはほとんどどんな人間でも君の代りにやれた、それ故潜在的にはほとんどすべてのドイツ人が同罪であるといった。君がそこで言おうとしたことは、すべての、もしくはほとんどすべての人間が有罪である場合には有罪なものは一人もいないということだった。これは事実ごく普通の結論だが、われわれはこれを君に認めようとは思わない。<sup>(注22)</sup>

君が大量虐殺組織の従順な道具となったのはひとえに君の逆境のためだと仮定してみよう。その場合にもなお、君が大量虐殺の政策を実行し、それ故積極的に支持したという事実は変わらない。というのは、政治とは子どもの遊び場ではないからだ。政治においては服従と支持は同じものなのだ。<sup>(注23)</sup>

そしてまさに、ユダヤ民族および他のいくつかの国の国民たちとともにこの地球上に生きることを拒む——あたかも君と君の上官がこの世界に誰が住み誰が住んではならないかを決定する権利を持っているかのように——政治を君が支持し実行したからこそ、何人からも、すなわち人類に属する何ものからも、君とともにこの地球上に生きたいと願うことは期待し得ないとわれわれは思う。これが君が絞首されねばならぬ理由、しかもその唯一の理由である。<sup>(注24)</sup>

(下線部は筆者による)

高橋は、このアイヒマンの死刑判決を支持したアレントの論理には、彼女が「赦し」ではなく、「報復」に同意していることで、矛盾を感じると言う<sup>(注25)</sup>。「赦し」と「罰」を「復讐」に対立させたはずの彼女が、ここでは、「報復」としての「罰」に同意し、犯した罪と同じことを与える——すなわち「報復」を支持している、からだ、と説明する<sup>(注26)</sup>。「この世界に誰が住み誰が住んではならないかを決定する権利を持っているかのように——政治を君が支持し実行したからこそ」、アイヒマンは、同じように、「この世界に住むべきものでない」ものとして、死刑を言い渡されるべきであるというアレントに、高橋は、死刑を要求することで報復と見えるのであり、ここでは報復の論理を超えるような罰こそアレントは支持するべきだったと言う。確かに、死刑しか在り得ないという、初めに死ありきというのであれば、報復の論理となるわけで、高橋が指摘するように、「そう見える」かもしれないのも事実である。しかし、アレントにとって一番大事なことは、明確に被害者に分かる正義の回復の実施であり、「目に見える正義の実施」を何よりも優先していたと考えられるのである。そして、少なくとも、その時点で法律に基づく最高刑が死刑であった以上、ジェノサイドという犯罪に対して与えられる罰則が「死刑である」ことには問題はなく、それが「目に見える正義の実施」となったということでないだろうか<sup>(注27)</sup>。

1970年代、170万人が犠牲となったポル・ポト政権化でのジェノサイドに関わる判決が、2014年8月に出された。元最高幹部二名への終身刑である。当時、父親と第三人を殺害された遺族の一人が「最高刑である終身刑」を裁判所がくださったことについて感謝し、「正義がくださった」と述べている<sup>(注28)</sup>。ジェノサイドのような犯罪に、それが死刑であれ、終身刑であれ、法における「最高刑」がくだされること—すなわち目にみえる正義の実施なのである。

#### 4. ジェノサイド後の正義と赦し

「正義と赦しの関係」について、Muller-Fahrenholzは、アウシュビッツが明確にしたことだと



断った上で、以下のように説明する。

Aushwitz makes it abundantly clear that forgiveness can never replace justice. Human codes of law establish indispensable rules of life together and standards of relationships. Although all legal systems need constantly to be corrected and perfected, they constitute a fundamental achievement of the human race in its search for what is truly human. Any attempt to weaken the supremacy of the law thus entails the erosion of the humane. Forgiveness is about renouncing unjustified power, not about weakening the pursuit of justice.<sup>(注29)</sup>

(アウシュビッツは、赦しは決して正義とは入れ替わることができないことを十分に明確にした。法律という人間的法則だけが、不可欠な共生のルールと関係性の基準を確立できるのである。全ての法律システムは、絶えず正され完璧になるようにされる必要があるけれども、その法律システムこそが、真の人間とは何であるかを求めてきた人間の根本的といえる達成なのである。それゆえ法律の優位さを弱めようとするどんな試みも、人道的なるものの腐食である。赦しとは、不正な力を廃することであり、正義の遂行を弱めることではないのである。)

正義は赦しと互換できない。そして法律で確立される正義だけが、人間の関係性と共生を取り戻すのである。しかし、同時に、正義と互換出来ない赦しは、正義の回復後にやってくる時、最終的には、正義を超える力がある。

At the same time, it must be emphasized that forgiveness goes beyond justice. While legal systems and procedures provide societies with reliable structures of punishment and protection, forgiveness strives to heal the grief and re-establish the deepest qualities of humanity.<sup>(注30)</sup>

(同時に、赦しは正義を超えることは強調されねばならない。法律システムとその遂行が、社会に罰則と保護の信頼できる構造を与える一方、赦しは、悲しみを癒そうとしてくれるのであり、人間性の最も深層に存在するものを再び確立してくれるのである。)

つまり、法律に基づく正義の回復の後に来る赦しこそが、本当の意味で人々を癒し、あるべき人間性を確立して、ジェノサイド後を再び生きることを可能にしてくれることになる。

物語に戻ろう。ヴァーンが、法廷に戦争犯罪人を連れ出そうとする男と論争した時、ジェノサイドでの行為に正当な罰など下せないという点では二人は実は一致している。しかし、ひたすら復讐だけを思うヴァーンには、たとえ復讐を成し遂げたとしても負のスパイラルだけが残り、法廷に連れ出し法のもとに正義の回復を試みる者には、その後赦しの感情の可能性が生まれる。それは、被害者のその後の人生にとって、あまりにも大き過ぎる違いなのである。それだからこそ、ジェノサイド後にどれだけの月日経っても、ジェノサイドの戦争犯罪者は、追跡されなければならない<sup>(注31)</sup>。赦しは、時間とともに自然に出現することを期待できるものではなく、法のもとによる正義の回復の行使の後に伴って生まれることしかできないからである。

正義の回復という過程なしでの赦しは不可能であり、そう見えるものも本質的に違うものとなる。例えば、慈悲である。この赦しと慈悲の違いを、J. G. Murphy は、*Forgiveness and Mercy*<sup>(注32)</sup>で、以下のように述べている<sup>(注33)</sup>。そもそも、赦しは、不正な行為をされた者が、その行為に責任のある者に対して持ちうる感情であり、慈悲ではない。慈悲深いというのは、本来なら権利を持っている者が、本来与えることが出来るはずの厳しさを減らして相手を扱うことである。丁度、『ベニスの商人』で、シャーロックにポーシャが慈悲を求めるように、である。一方、赦しは、「私があなたにどのように感じるか」という感情の問題である。とするならば、相手が死ん

でしまっても赦しの行為は存在するが、慈悲の行為は可能ではなくなる。

また、「赦し」という言葉は、二節にあげた復讐と対照するものとしてよく使われるが、最終的に、赦しは、暴力と苦悩のスパイラルにしか取り込むことがない復讐の「代替」になり得ると考えてよいのだろうか。まず、赦し自体はどのように私達に起こりうると考えられるかを考えてみたい。一般的には、以下のように、赦しが可能になると提示されている。自らに不当なことをした人間を赦すためには、その人間が以下のどれかにあたることを確認する必要がある。

1. he repented or had a change of heart or
2. he meant well (his motives were good) or
3. he has suffered enough or
4. he has undergone humiliation (perhaps some ritual humiliation, e.g., the apology ritual of "I beg forgiveness") or
5. of old times' sake (e.g., "He has been a good and loyal friend to me in the past").<sup>(注34)</sup>

- ① 後悔した、または心を入れ替えた。
- ② 良かれと思ってした。(そもその意図は良かった。)
- ③ 見合うだけ十分苦しんできた。
- ④ 恥辱を受けた。(恥をかくといった慣習的行為、例えば「赦してください」というような謝罪行為)
- ⑤ 昔のよしみがある(例えば、かつては私の忠実な親友だった。)

ヴァーンの場合にこれらの条件をあてはめてみよう。⑤は存在しない。②は考えられない。とすれば、①、③、④だけが可能性として残される。多くのジェノサイドに関わる犯罪人とみなされた人々が法による裁きを逃れて国外へ逃亡したが、ヴァルトもまたそうである。その祖国を捨てるしかなかったという事実だけで、彼が十分苦しんだと見なすことはとても出来ないだろう。自分が収容所の者たちには一切許さなかった人間らしい生活を営む自由を得るために、逃亡したのだから、③も無理がある。とするならば、ヴァーンがヴァルトに直接対峙した時に、①と④に遭遇したなら、少なくとも赦しの可能性があったことになる。しかし、ヴァルトが復讐を聞かされて半狂乱になって自分の命乞いだけを続ける姿には、①の、心を入れ替えた様子は見ることはできない。とすれば、④だけが残される。しかし、ヴァルトは、ヴァーンの赦しは一切請わなかった。過去したことに全く触れず、自分の命乞いだけが彼のしたことである。ヴァルトがヴァーンに求めたのは、ヴァーンの赦しではなく、命を救ってくれること、すなわちヴァーンの慈悲である。こう考えると、物語において、ヴァーンは、彼の復讐を止め、赦しに向かえるかもしれない理由を、直接対峙の時において全て失っている。つまり、そこには赦しをヴァーンに可能にする理由が存在しないのである。だから、ヴァーンは赦しには向かえない。同時に、前節で述べた理由から、彼は嫌悪感で一杯になって、復讐を実施できないでいる。つまり、赦しは彼には可能にはならないのだが、同時に、復讐を全うすることも出来ないジレンマにある。前項に述べたように、復讐の暴力を実施した時、彼もまた負のスパイラルに入るだけである。当然、そのような論理的に分析をすることは不可能なまま、ヴァーンは少なくとも、復讐によって、自分がヴァルトと同等の人間になることだけは感じてしまったのである。赦しも出来ず、復讐も出来ない。だからこそ、ヴァルトが海に向かって自ら消えていくという思いがけない自殺的行為によって、自らが行使しようと考えていた暴力行為の前で、それ以上の葛藤もなく踏み止まれたことを、神にただ「感謝する」のである。ジェノサイドの最中には、一度も被害者に関わることはないかのよ

うに見えた「不在」の神が、ジェノサイド後は、ヴァーンをヴァルトまで導き、最後の瞬間に復讐の行為を彼の手から取り上げ、ヴァルトの自死を彼の行為の罰則に妥当な死でもって、正義の回復であるかのごとくヴァーンに示してくれたからである。その後、ヴァーンには赦しのような感情は起こったのだろうか。神が正義の処罰の様相を取ってくれたように見えるとしても、実際には、それは法による処罰ではなく、ヴァーンが踏み止まったのも、復讐の路のりの最後の段階である。これは、赦しの起こる条件を満たすのだろうか。いずれにしても、物語では、「神への感謝」以後の、彼におきた感情は語られていない。ヴァーンと語り手の私の再会は、彼が爆発で重傷をおった病院のベッドであり、戦後に起きた出来事をそこまで話した後でヴァーンは亡くなるからである。

そもそも、ジェノサイドのような犯罪の後に、一般的な法則に従っての赦しが可能になるのだろうかという疑念が存在することは否定できない。実際、アレントは、「極端な犯罪と意図的な悪」には赦しは適用されないと考えている<sup>(注35)</sup>。しかし、これとは反対に、ジェノサイドのような犯罪だからこそ、そこに赦しはあり得るのだと考えることでしか、ジェノサイド後に希望が存在しないのも事実なのである。

## 5. ジェノサイド後の赦しとは

再度、困難のリストに戻ることにする。第四の困難、ジェノサイドのような暴力行為に対して被害者に正義を取り戻す行為は、「完全な正義の回復と思えるような形」—それが存在していると仮定したとして—では実現可能とならないこと—に、こう続きを加える必要がある。たとえそうだとした場合、唯一、この困難を超える方法は、法のもとに出来るだけ多くの該当する者を裁き、正義を出来る限り取り戻す努力しかない。そして、それが、人々が赦しの感情に到達し得て、本当の意味で再び生きることが出来る唯一の道である。

ジェノサイドの特異性によっておこる困難を含めて、ジェノサイドについて正しく教えるために考察していく過程で、明確にするべきことがさらに残されている。その一つは、ジェノサイド後にくる可能性のある赦しの感情そのものである。この状況における赦しの感情とは、実際はどのようなものだと説明するべきなのだろうか。本稿の考察のために使った『宮廷の道化師たち』に戻って考えてみたい。ジェノサイド後にもたらされた赦しについて、物語では、赦しとはこのような感情であると明言しては描いていない。しかし、赦しの感情として示唆しているものは存在する。

自らの手で復讐を成し遂げる寸前、それをする必要がなくなったことに、神への感謝でいっぱいになった、そのヴァーンも、後でたどりついたイスラエルで、市中のテロ行為に巻き込まれて死亡する。四人のうち、生き残った二人のうちの一、マックスが、もう一人の語り手である私に問う。マックスの若くして病死した妹マルタ、マックスを案じていた側だったのに、戦後、すでに銃殺されていたことがわかる恋人のドイツ人ヒルデ、夫が生きているために回し続けるボールによって引き起こされた士官の怒りで射殺されたヴァーンの妻エステル、解放され自由を手にした直後に事故死したレオ、そして、偶然居合わせた場所のテロで死亡したヴァーンの名前を次々挙げ、「なぜ神は、こうしたあらゆる悲惨なことを為すのか？ (p.219)」と。口にはしないものの、マックスには、まだ思い浮かべるべき理不尽な出来事がある。ヒルデとの幸せな夜を過ごした翌朝、大学図書館の自分の机の上に置いてあった「人種冒涇者 (p.42)」と書かれた紙と絞首台に

吊るされる男の絵、捕まった後すぐに尋問で殺された兄のフェリックス、尋問の時、手元の硬いカバーの本を取り、全力で彼の頭を殴りつけ、「何といやはや、あなたにとっても本は何かの役にたつんですね。(p.51)」とうそぶいた男、それ以後、途切れるようになった思考。答えを得られないことはわかっているといた後でも、マックスはこう口にする。「神は、まさに司令官コールと同じように、己の気晴らしのためだけに我々を生かしているのでは？と考えたことはないかい？恐らく我々は、実際、彼の宮廷道化師に過ぎないのでは？と (p.222)」。この問いに衝撃を受けた私は、しばらく答えることも出来ない。私も、神の不在を感じていたはずなのに、である。私はついにこう答える。「もしそうだとすると、我々に最も素晴らしい舞台上で演じさせたのだと認めるべきじゃないか。身のまわりのあらゆる美しいものに目を向けるんだよ。(p.222)」

「復讐を望み、そして、それを成し遂げた。たとえそれが何年も思い描いていたのとは違うものだったとしても。しかし、それで彼に心の平安が戻ったと思うかい？本当に探していたものを見つけたのだろうか？(p.223)」問いかけをやめないマックスに、今までの経緯を聞いていた、私が「賢明な人物」だと考えている知人、メナヘムが言う。「たとえ、まさに探していたそのものが見つからなくても、探す者、本当に探し求める者は常に何かしら良いもの、その人にふさわしいものを見つけ出すんだよ (p.224)」。それを聞いて、私は、こう続ける。「ヴァーンは復讐を追求し、そして神様を見いだした (p.224)」。マックスは納得できないでいる。最後にメナヘムは、一つの祖父が教えてくれたエピソードを語る—「主なる神が我々になされようとされる何もかもすべてを理解することより、自分の隣人が助けを必要とするときにそれに気づくことのほうがより大切だということ (p.229)」、神が忙しすぎて、近隣の年老いた人、体の不自由な者のことを東の間忘れていてから、「お前がちょっとのあいだ代わりに行ってできる限りのことを手助けするんだ。(p.229)」、そうしていれば、「主なる神はお前に悪いようにはなさないよ。(p.229)」メナヘムは、祖父の見方は正しかったと今も思っていると言う。

その夜、私は、何度も見てきた夢を見る。夢では、宮廷道化師の四人だけが長く生き残っている。ヴァーンのカラーボールが奇妙な穴に吸い込まれ、目醒める。その夜だけは、私は起き上がって外に出る。マックスの問いが、何度もこだまのように戻ってくる。全能の神は宮廷道化師のように我々を自らの慰みのために生かしているだけなのだろうかという問いが頭から離れない。混沌と憂鬱、そして無力感。その時、私は光の細い筋を見る。地平線に延び、遠くの山脈の斜面に沿って、上空まで立ち登る、その東の間の瞬間、大地も、山々も、花も、すべてが光をまとう。

「決して解りはしないのだと私は分かったのです—問うことは断じてやめませんが—こうしたすべてのものの背後に何があるか、なぜ星が宇宙を、そして血球が私の血管内を循環するのか、けれど私にはこの瞬間、一つのことがはっきりしたのです。」

「こんなにも多くの、えも言われぬ美しさが、目的もなく創られているわけがないということ。こうしたあらゆる美に驚嘆し、見とれて立ち尽くすことが許される者たちが、それを創造した者の気晴らしのためだけに創られたとは考えられません。その者たちがこの地上で、宮廷道化師として創造者に仕えるためにだけ存在するのではないのです。」(p.237)

そしてこう続ける。

「それ以上のことは、何も解りはしません。けれど、少なくともそのことが今、分かったのです。」(p.237)

この物語で描かれたジェノサイド後の「赦し」とは、出来事が神の不在を信じさせるしかないような残酷さに満ちていたとしても、生を得、そしてまだそこで生き続けている世界の美しさに気付くことが出来、それを享受できる能力を持ち、素直に自らが今生かされる喜びを認めることができるような感情なのである。

### お わ り に

本稿の考察の基として使った物語『宮廷の道化師たち』は、前回の論稿で考察した、第一の困難であるジェノサイド後の記憶の保持についても、「私」に何度も語らせている。忘れさせないための証言は、裁きや刑罰の前にあり、それこそがジェノサイド後に生きる目的として挙げる<sup>(注36)</sup>。同時に、完全な証言などは存在し得ず、重い荷を運び、次々に失い、巨大な忘却の山の横に、小さな墳墓をかりうじて残すようなものである<sup>(注37)</sup>。作者のダガンが、アイヒマン裁判をめぐるアレント論争の争点を強く意識していることは間違いない。語り手は裁判官だった私で、戦後は、法廷に戻らない。自分に裁く資格があるのかに確信が持てない<sup>(注38)</sup>。裁きの限界も感じている<sup>(注39)</sup>。もう一人生き残ったマックスは、歴史学の学徒。大学図書館に勤めており、人間の精神性の偉大さを示し優れた知性の象徴である書籍に囲まれる場所を心から愛する青年だったが、13世紀に起きた魔女狩りのようなことが自分達に実際降りかかることに愕然とする<sup>(注40)</sup>。作者ダガンが、法と歴史に関わっていた二人を四人のうち最後に生き残った二人として意図的に登場させたことは明らかである。物語の終わりの二人の会話は、法と歴史は、ジェノサイドについてどのように関わるのかを問いかけているともいえよう。現実の政治が自らに関わることなく歴史に組み込まれる断片のようなものとして傍観者でいたのに、実際は、出来事の真っ只中に被害者として入り込んだマックス。戦後、法が裁く限界にも、自分の裁く資格にもためらい裁判官職には戻らない、そして、答えられないことだらけだと思いつつ、それでも、最大限に不可能な出来事を「証言する」ことが自らの生きのびた目的だったことだけは疑いがなく考える私。歴史も法においても、どんな困難が存在しようとも、ジェノサイドの正義の回復とその記憶の保持のために、さらには、それを繰り返さないために、真摯な向き合いが、葛藤、疑念、そして混乱の中の過酷な努力をもって必要とされているのである。こうしたジェノサイドを取り巻く正義の回復における様々な困難を強く意識して書かれたと思われるこの物語の最後が、「赦し」の感情らしきものの記述で終わるのは、作者ダガンの赦しの存在への強い希求がこめられていると考えるのである。

「出来事の記憶」「政治的配慮」「大勢が該当する」、「完全な正義の回復と思えるような形では実現可能とならない」、「法の外の『別方法』が被害者に必要と思われる」—こうしたジェノサイドの特異性ゆえにおきるジェノサイド後の正義を取り戻す時に直面する困難—に対して、異文化コミュニケーション教育が一つの考えを学習者に提示するとしたら、ジェノサイドを実施した政治システムを「支持した個人」としての責任を、ジェノサイドという犯罪の性質からくる証言の不完全性が存在する中でも、ともかく、法廷で、法による罰則で裁き、被害者に正義を戻すこと、それが、負のスパイラルに陥るしかない報復ではなく赦しに向かえる唯一の方法であること、そして、その後だけ、赦しは起こり得て、その赦しによってだけ、人々はジェノサイド後を再び本当の意味で生き得ること、その時は、法による罰が報復の論理に陥らないように、法が政治と分離した公正な立場を維持できる努力だけは不断に要求されること、であろう。そして、こ

れらがどんなに逆説的に聞こえるとしても、この過程を真摯に実施することだけが、不完全にしか伝えることのできないジェノサイドの記憶の困難を補い得る唯一の方法なのである。

しかし、ジェノサイド後、再び真の意味で生きるためには、「赦し」の存在や不在を意識して希求する必要がなかったような者達が、それは自分を含めてであるのだが、教育において「正しく語る」ことは出来るのだろうか。もしそれを試みるのであれば、語る者の側の責任はどうあるべきなのだろうか。なぜなら、世界で今ジェノサイドが進行中である時、それを見逃している「我々」、これもまた自分を含めて、の責任をも問わなければならないことになるだろうから、そして、過去の自国の行ったことに対する責任はどのように考えていくべきかという問いを避けられないから、である。まさに、アレントが言うような「道徳的責任」、そして「政治的責任」である。これらについて、どのように異文化コミュニケーション教育では考えるべきかについて、次稿で引き続き考えていくことにする。

(注)

- (1) 青木 順子「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題 (16) —異文化教育における『ジェノサイド』—」安田女子大学紀要 No.41, pp.101-116, 2014.
- (2) ダガン・アヴィグドル 千野栄一・姫野悦子（訳）『宮廷の道化師たち』綜合社, 2001. なお、本稿では、小説から抜き出した場合は、(注)をつける代わりに、頁数のみを記す。
- (3) “One of the most powerful novels to come out of the Holocaust” *Booklist*, “In the manner of Gunter Grass or Milan Kundera…Avigdor dagan has created a modern fairy tale to explore some of the important philosophical questions arising from the Holocaust” *New York Times* (Dagan, Avigdor *The Court Jesters*, Bloomsbury Publishing, 1991.)
- (4) G. Muller-Fahrenholz *The Art of Forgiveness* WCC Publications, 1996.
- (5) Muller-Fahrenholz, p.19. 日本語訳は筆者による。
- (6) Muller-Fahrenholz, p.19. 日本語訳は筆者による。
- (7) Arendtの日本語訳については、「アレント」、また「アレント」と表記の仕方が訳者によって違いがあるが、論文中では、すべて「アレント」と統一している。
- (8) アーレント, H. 大久保和郎（訳）『イエルサレムのアイヒマン』みすず書房, 1969.
- (9) 大久保 和郎, 「解説」（アレント, H. 大久保和郎（訳）『イエルサレムのアイヒマン』みすず書房, 1969.）
- (10) アレント, ハンナ ジェローム・コーン（編）中山 元（訳）『責任と判断』筑摩書房, 2007.
- (11) アレント, 2007, p.27.
- (12) アレント, 2007, p.27.
- (13) アレント, 2007, p.37.
- (14) アーレント, 1969, p.229.
- (15) アレント, 2007, p.38.
- (16) アレント, 2007, p.38.
- (17) アレント, 2007, p.39.
- (18) アレント, 2007, p.39.
- (19) アレント, 2007, p.42.
- (20) アレント, 2007, p.59.
- (21) アーレント, 1969, pp.213-214.
- (22) アーレント, 1969, p.214.
- (23) アーレント, 1969, pp.214-215.
- (24) アーレント, 1969, pp.214-215.
- (25) 高橋 哲哉 『戦後責任論』講談社, 1999.
- (26) 高橋, pp.106-107.

- (27) いかなる罪にしろ、死刑を持って法による罰則とすること自体が報復になってはいないのかどうかという真摯な問いかけは不断に要求されるべきだが、それはまた別の次元の議論となろう。
- (28) 「最高刑を下してくれた裁判所に感謝したい。犠牲になった家族のためにも、正義がくだされることをずっと願ってきた。」(「元ボト派最高幹部 終身刑」読売新聞 2014年8月8日) 同じ記事に引き続き、別の被害者の言葉が出ている。「終身刑でも不十分だ。」これこそが、ジェノサイドという犯罪の特異性からくる困難の一例なのである。
- (29) Muller-Fahrenheit, viii~ix. 日本語訳は筆者による。
- (30) Muller-Fahrenheit, viii~ix. 日本語訳は筆者による。
- (31) 今でも毎年のようにあらたに検挙されたナチス残党の記事が出てくる。老齢の彼等を「今だに追っている」ことに驚きの反応を示す者もいる。「正義を取り戻すこすためには、時効がないこと」の理由についての理解が欠如しているからである。
- (32) J. G. Murphy *Forgiveness and Mercy* Cambridge University Press, 1988.
- (33) Murphy, p.20.
- (34) Murphy, p.24. 日本語訳は筆者による。
- (35) アレント, ハンナ 志水速雄 (訳)『人間の条件』筑摩書房, 1994, pp.375-376.
- (36) 「生き残る意味は、ただ話をし、訴え、証言し、真実を明るみに出すことだけでした。それが、我々の唯一の使命でした。(中略) 証言をすること、忘却への戦いに挑むこと、それが我々の使命だったのです。」(ダガン, p.111) 「けれど、また我々の誰も、決して完全な証言をもたらすことはありませんでした。我々が担うべき荷を極めて重いもので、実際各人が持ちこたえられたのはほんの小さな粒にすぎず、たとえ我々が蟻の軍隊のように疲れ知らず粘り強かったとしても、それが我々が運んでこれる限界だったでしょう。」(ダガン, p.112)
- (37) 「我々が持ち出さず、また途中でつぎつぎと失くしたものの山、それに恐らくは我々が持ち出さず、また途中でつぎつぎと失くしたものの山、それに恐らくは我々が忘却への戦いに立ち向かっているうちに、みずから忘れてしまったものの山であったに違いない。その山の傍らに、蟻塚がただ小さな墳墓として残ったのです。」(ダガン, p.112)
- (38) 「私達は誰もが飢えて死にかけていました。泥棒たちが、ときには半ばかびの生えた一切れのパンを盗んで、ただ束の間、空腹を鎮めるためにだけ、殺人者と化してしまったのを私は知っていました。私に果たして彼らの判事になれたでしょうか。裁ける資格があったでしょうか？我々にこっそり食べ物を持ってきてくれ、我々のうちの一人ならずもの生命を救ってくれたであろうドイツ人の見張りを知っていました。その同じドイツ人が、採石場での作業場へ捕虜の一隊を連れていく下士官のただ軽く頷くだけの合図に従って、行進中につまずき、隊列からはずれた人間の頭蓋骨を銃の端で打ち砕いてしまうのを見たこともありました。私に裁く資格があったのでしょうか？果たして審判を下せたでしょうか。」(ダガン, pp.14-15)
- (39) 「どの裁判所が、底なし地獄の深みのうえで為された犯罪に対する判決を下せたでしょう。どんな刑罰も、じゅうぶんというにはほど遠いものでしょう。」(ダガン, pp.111-112)
- (40) 図書館の彼の机に置かれていた「人種冒涇者」と記された紙と絞首台に吊るされた者の絵をある朝見る。「政治については、これまでほとんど関心はありませんでした。新聞にはもちろん目を通していましたが ……いつか歴史の一部となるであろう素材だったのです。」(ダガン, p.42) 「マックスは、図書館の書棚を見渡しました。ゲーテ、シラー、カント、何十、何百という、かつて世界的に名の通った最大級の偉人たちの名。この民族が、あるときヒステリックな無学な群衆によってがなり立てられたスローガンでもって導かれるかもしれないというのは、まさに滑稽なことでした。目を遣りさえすれば、その書棚のどこにでも並んでいるその名は、マックスにとっての精神的遺産でもありました。彼も、父親も、祖父も、この人たちが世界に与えたものの中、その人たちの間で成長してきており、そこに、他のどんな知識よりも深く根を下ろしていたのです。けれど彼の視線は、目の前の机上にある一枚の紙へ、何度も何度も戻っていきました。」(ダガン, p.43)